

---

# 誕生

山羊ノ宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誕生

### 【ZPDF】

Z2230P

### 【作者名】

山羊ノ宮

### 【あらすじ】

世に怪盗はびひの時、そこには必ず名探偵がいる。

世に怪盗はびこる時、そこには必ず名探偵がいる。

人々は時に怪盗の見事なトリックに酔いしれ、名探偵の鮮やかな謎解きに感嘆する。

しかし、そんな映画の一幕の様な夢の舞台は永遠に続く訳ではない。人には寿命と言うものがあるのだ。  
もちろん怪盗にも名探偵にある。  
宴は必ず終わりを迎えるのだ。

そして、今宵。

まさにその終幕の時がやって來た。

カツリカツリとトレードマークの赤いハイヒールをかき鳴らしながら、その女探偵は地下に下りていった。

階段をおりきつた所の部屋を開けると、そこには円卓があり、仮面をつけた人々が座つて彼女を迎えていた。

一つだけ開いた席があり、女探偵はそこへと足を進めた。そして、彼女は席を一度引き、また元の位置へと戻した。

「その様子だともう答えは揃んだようだね」

その会合のホストらしき男が彼女へ問い合わせる。

「ええ。厚い雲を裂く陽光のように、はつきりと見えているわ」

彼女は胸を張り、そう答えた。

ホストらしき男は頷く。

「では、そちらを」

そう言って、ホストらしき男は円卓の中心にある水差しを彼女に勧めた。

彼女は水差しを取り、水差しの上に掛けられていたグラスを外した。

そして、グラスに水差しの中に入っている液体を注いでいくのである。

ちょうど六分目の所で彼女の手が止まり、コトリと水差しが置かれた。

その一連の動作を周りの仮面の人々は緊張感を持って見守っていた。

グラスの淵を彼女は指で撫でる。

「では、答えを」

「怪盗は・・・」

指がグラスから離れ、三つ右隣の人物を指差す。

「貴方だ」

指差された人物からは笑いが漏れる。

じとりと彼女の頬を汗が伝つた。

「当たりだ」

そう言って、指差された人物は仮面を取り、回されてきたグラスを手に取る。

ぐびぐびとのどを鳴らし、中に入っていた液体を飲み干す怪盗。

やがて怪盗は血を吐き、その場に倒れた。

「では、次代にて相見えよう。諸君」

その瞬間、新たな怪盗、そして新たな名探偵が生まれたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2230p/>

---

誕生

2010年11月30日09時07分発行